
all the way

清河 和実

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

all the way

【Nコード】

N3417S

【作者名】

清河 和実

【あらすじ】

アーティラスと言う、他の生物とは何かが違う生物『バグ』と言う存在がいる世界。人々はそこで防壁を建て、バグを牽制して生活をしていた。

その国の一つである学園国家エクアゲンに住み、戦士学科という分野を学び、日々強くなる事を目標に過ごしている主人公ノークの姿を描いた物語。

仲間達と共に強くなっていく物語。

第一章 序章（前書き）

楽しく書く事を信条に、小説を投稿させて頂きます。
宜しければご朗読ください。

この物語はフィクションです。

この物語の人物、団体、国家、その他全てのものとは、名称が同一であっても何の関係もありません。

この小説は縦書きで読む事を御推薦します。

第一章 序章

その世界の名前は『アーティラス』。

ありのままの自然を残し、その自然から湧き出る恵みは大地と生物を潤していた。

それは人間も例外ではない。自然と共に生き、時間を謳歌していた。

しかし、人間は向上心に溢れる生き物だった。それは他の生物には見られない大いなる意思であり、人間が誇れるものの一つだ。

人間は自然から恵みを受け、時には巧みに利用して『人間の世界』を広げて行った。

だが、世界はそこまで優しくは無かった。世界には『バグ』と呼ばれる存在が生命を育んでいた。

猛獣よりも圧倒的な力。時には知能を持ち人間と対等以上に存在していた。

その為人間は自身らの住処を囲う様に大きな防壁を作り、外から中を隔離した。壁の中は『人間の世界』。壁の外は『ありのままの世界』となっていた。

壁があればそこは国。それが世界の常識だった。

エクアゲン。

人口百万人強の巨大国家。世界的に有名な国。

年間を通して穏やかな気候を保持し四季がハッキリしている珍しい国であり、国土の中に海も存在する。

世界的にも珍しく民主制の政治確立し、世襲争いなどを持たない国としても有名だ。

しかし、エクアゲンが世界的に有名な国なのは、その国家の資質にある。

エクアゲン。それは世界で唯一の『学園国家』なのである。

常に世界の学問の最先端を突き進み、有名な学者の多くはエクアゲンの出身。もしくは留学経験のある人間である。

そのエクアゲンは近年、全世界から多大な注目を浴びた。

何故なら、エクアゲンは戦士学科と言う学問を成功させたからだ。

この世界には『戦士』と言う職業が存在する。

戦士とは各土地や各国のギルドに所属している傭兵の様な存在。

ただ傭兵と違い金銭を受け取ればどんな事でも行う訳ではない。

特に戦争への参加は国際法律で基本は禁止とされて、違反を犯した者は世界的な重犯罪者と見なされる。

戦士は軍隊と違い、完全に自分の力量で全てが決まってしまう職業なので職業人口はあまり多くない。

戦士になるには戦士家系に生を受ける事か誰かの弟子入りする事、もしくは戦士家系に養子になる事が一般的なのだが、エクアゲンは戦士職を学問として取り扱っている。

これは前代未聞の行いであり、実質不可能と目されていた事をエクアゲンはやってのけたのである。

現在では戦士になるのならエクアゲンに行くと言う程まで確かな成績を上げ、元戦士の人間や、今でも名のある現役戦士を教師として迎えている程である。

更にエクアゲンは世界にある全ての学問に精通した国家である為、他の教科を学ばせる事でかなり優秀な戦士を続出させている。

こうした背景から、元々世界的に有名だった学園国家エクアゲンは更に盤石な地位まで伸し上がり、世界の中心の一つとなっていたのだった。

~~~~~

西暦1693年 四月八日 春

どの国でも朝の光景はそう個性は無い。

留学生である少年もいつもの様に目が覚め、いつもの様に身支度をする。

少年ノクタス・アファルト・ギルハーツの朝は午前六時頃から始まる。

精悍な顔立ちだが、少し女性よりの印象を受ける。茶色の髪を肩まで伸ばし後ろで結っている。翡翠色の目が特徴的な少年だった。昨年まで中等科三年生だった彼は今年から高等科に進学となる。しかし、これと言って期待感はない。他の学科と違ってノクタスの通う学科はそこまで大きな変化はないからだ。

彼もまた戦士の一人であり、この場で強さを追い求める人間の一人であった。

自前のトレーニングウェアに着替えたノクタスは朝食を食べずにドアの近くに掛けてある鍵を持って自室を出る。

「行つてきます」

一言呟くと彼はそつと扉を閉め、鍵を掛けた。

ノクタスの住まいは1DKの大型アパートの一室だ。

エクアゲンは学園国家と呼ばれているが、意外に生徒の住むアパートやマンションの場所は一纏まりになっておらず疎らだ。

エクアゲンでは中等科二年までは、学園に最寄りの学生寮で過ごす事になるが、殆どの生徒は中等科三年になると同時に寮を出て適当なアパートやマンションに引っ越す人間が多い。

ノクタスも例外に漏れず、その一人である。

寮では確かに食事の世話などもしてくれるが、門限や規則がある為、騒ぎたい年頃の少年少女達には窮屈な場だ。

そして日課となった早朝ランニングですら、その自由の一つだっ

た。

現在では慣れた道を進み、元々都市型国家のエクアゲンでも自然が溢れる場所である自然公園を目指す。

一定のペースを変えずに走り続ける中、遠目に見える学園を見る。エクアゲンの中心より若干北側に位置し、この国でも最大の大きさを誇る建造部である。意図的なのだろうか周りに学園を超えた大きさの物が無い為、余計に際立って見える。

この国家の象徴であり国家そのものの中心点である学園から目を逸らし、ノクタスはペースを変えずに進んでいく。

「そうだ、もうすぐ新学期だ」

今まさに思い出したかの様にノクタスは呟く。

今年から何か変わるのか、それとも今まで通りの人生なのか。どちらにしても、戦士学科にいるのならば退屈はしないとノクタスと思う。

そうして、今日もいつも通り歩を進めるのだった。

朝は着々と始まりを魅せていた。



## 第一章 第1話（前書き）

この物語はフィクションです。

この物語の人物、団体、国家、その他全てのものとは、名称が同一であつても何の関係もありません。

この小説は縦書きで読む事を御推薦します。

## 第一章 第1話

西暦1693年 四月十日 春

学園国家エクアゲンの中の建造物の中で最大規模を誇る『アリーナ』と呼ばれる十万人を内包できるドームがある。最近新築し外見は楕円形の建物を、屋根で無理矢理に卵型の様に包装した形をしてしばしば『溶けたアイス』と皮肉される事もある建造物である。しかし、機能性は本物でエクアゲンの大きな行事などは大抵ここで行われる。

学生が中心で回る学園国家にとって始業式は大行事の一つだった。外では数日前から始まっている新学期セールという名目で値引きをしている店が数多くあり、アリーナの敷地内では今頃始業式の終りを見計らって沢山の屋台が出ている頃であろう。

一方始業式の会場であるアリーナの中では、厳粛な雰囲気や南側に演説用の壇上を用意し、思い思いの正装を着た生徒はその壇上の方角を向いて椅子に座っていた。

『したがって、学生諸君には大いに勉学に励み……』

大きな腹とスキンヘッドが特徴的な小柄の学園副総長の、長ったらしい演説がアリーナ内に響き渡る。

実際に聴いているのは真面目な生徒か副総長の権力に寄り付こうとする教員位だ。

このエクアゲンは、学園を中心に回っているだけあり、国という立場から見ても学園の頂点に位置にいる人間は、元老院を中心に国営をしている国から見ても、多大な影響力を持つのだ。それ以外は寝ているか小声で談笑しているか、携帯電話を弄ってゲームやメールのやり取りをしているかである。

「なあ、ノーク」

日の当たる位置でのんびり日向ぼっこをしていたノクタスの横か

ら、自身を呼ぶ声が聞こえてきた。勿論ノクタスも副校長の演説など一割も聞いていない。

「んだよ。デユナ」

ノクタスを読んだ少年はデユナと呼ばれた。ノクタスとは腐れ縁で結ばれた友だ。本名をデユナミス・ライフォロス。黒髪をして、眼鏡を掛けたインテリチックな少年。金色に近い瞳をしている。仲の良い友の中では？デユナ？と言う愛称で通っている。頭が切れるが基本は怠け者。しかし、やることはしっかりとやっているのもそれに対して文句を言えなくしている抜け目の無い性格。ノクタスの親友兼悪友である。

「この後どうする？」

この後とはすなわち始業式が終わった後だ。始業式は基本的に午前中に終了し、その次の日から授業が開始される。その為、始業式をやった後の時間は必然的に空くのである。

「……帰って寝る、かも」

そっけなくノクタスは返す。正直何にも考えてなかった。

「今がまさに寝る為の時間だろうが。この後は店回るぞ。ビンボー学生にとって、セールを制する者が明日を制す」

なんだかよく分からないが、何となく説得力のある格言を残すデユナミス。ただ、その発言には少し誤りがある。

「俺らは基本的に金あるんじゃないか？ 比較的貧乏ではないと思うんだが」

ノクタスの言う？俺ら？とは戦士学科に通っている生徒の事を指している。

戦士学科は他学科の生徒より優遇される。学費の一部分や遠征する為の費用の支給、必須加入保険の金銭関係の譲歩などが優遇対象となっている。その大きな理由は命を賭ける授業、課外授業があるためだ。

戦士学科にも必修の筆記授業と実戦授業が少なからずあり、その必修単位を獲得すれば他の授業を取らなくても咎められる事は無い。

しかし、それらを全ての単位を獲得するだけでは卒業する事はまず出来ない。その為、戦士学科を卒業する為には課外授業、通称『依頼』での単位獲得が必然となるのだ。

元来戦士とは、各所にある会社の様な組合であるギルドに所属し依頼を受け、その依頼の報酬に金や物を受け取るのが一般的であり大まかなルールの一つである。

学問とし取り扱われているこの戦士学科でも、戦士のルールは守られていて、国が任務を受け取りその任務を課外授業とし戦士学科に通っている生徒がこなすという方針が取られている。

エクアゲンの場合、学問である為に戦士の任務完遂がそのまま単位になる。

ただ『任務』は、普通の各授業とは違い生徒は命を賭ける必要がある。

そうなれば、命を賭けて任務をしている生徒に依頼金が渡るのは筋と言うものだ。その為、依頼金の生徒への受け取りは認められ、その他の事でも待遇がされている面が多いのだ。ただ、代わり戦士学科の生徒は、国家奉仕が義務付けられていて、依頼を受けて完遂すればそれが直接単位にはなるが、依頼金の量に関わらず全体の二割を国家に献上しなくてはならない。

それでも一般的な学生が保有している金額より遥かに所持しているのは確実だろう。

「バカ、他にも色々金がかかるだろ？」

「お前は主にラノベとゲームだろ？ それを止めりゃ、だいぶ楽な生活できるぞ？」

確かに、使用する武器の手入れや必要な消耗品など調達が主となるが、戦士学科は結構な資金がかかる。しかし、デユナミスの場合のビンボーとは八割方、彼の趣味による浪費の所為だ。

デユナミス・ライフォロスと言う人間は、所謂インテリチックな美少年だ。しかしその実、ライトノベルと言うジャンルに分かれる小説とゲームが大好きな人間である。勉強の成績は良いには良いが、

これらは全て暗記と言う行為で乗り切っているツワモノなのだ。教科書の内容の重要部分や計算のやり方をその場限りで暗記しているから、筆記テストの成績が良いのだ。

彼の事をよく知らない人間は、デユナミスのインテリチックな美少年の？インテリ？の部分が反則的理不尽行為だと知らない。その分、デユナミスは雑学だったりする物は沢山知っているので、余計に分からなくなってしまっている。

「お前は、俺に、死ねと？」

結構本気な目でノクタスを見据えるデユナミス。その眼はどこまでも真っ直ぐだった。

（あ、そこまでなんだ）

不覚にもノクタスの心には悪友の熱意が親身に伝わってしまった。傍から見れば大変仲の良い会話をしている二人。ノクタスも別に店を回るのは良いと思っている。しかし、ちょっとした疑問をぶつけてみる。

「なんで、二人で回るんだ？」

「二本セットとかの商品を。二人で割り勘すれば超おいしい」

「あ、そ」

別にそこまでする必要があるのか。と疑問を呈したくなるが、こんな事はこの二人の間では当たり前のようにある事なのでノクタスは特に気にはしない。

『では、以上です』

やっと長い拷問の様な時間が終わり、生徒だけでなく教員までも疲れを吐き出すような溜息をし、会場はその解放感から少しざわめき立つ。それに対して満足行くまで喋った副総長はご満悦な顔をしている。

「許可が出れば、あいつの鼻へし折ってやるのに」

デユナミスがなかなか物騒な事を言うが、実行しても止める人は少ないだろう。

「その時は俺も呼べよ？」

とりあえず、ノクタスは返事をするようにその言葉に自分の言葉を入れておく。

『では続いて、学園総長のお話です』

司会を務め大学院生であろう男子生徒も副総長の話に嫌気が差したのか、先程の副総長の紹介より早口で行事を進行する。

そこで老獪な男性が壇上に上がる。その途端に会場が一気に静かになる。

壇上に上がった口の周りに蓄えた長く白い髭が特徴的で、先程の副総長と違い豊満にある白髪之交じった髪の毛をオールバックにした老人。その年齢は八十を超えていて、この学園頂点にある人物。名をアグリビシユア・オルトライジ。腰は一ミリも曲がっている事はなく、とても軽い足取りで階段を上り演説の場に立つ。その壇上に立つ姿はまだまだ衰えを見せない五十代程の男性に見えてしまうほどだ。

「学生諸君。勉学に励み、スポーツに励み、競争に励み、恋愛に励み、粉骨碎身し、切磋琢磨し、勇往邁進に青春を謳歌せよ。以上！」  
そうして、何事もないように壇上を降りて行く。壇上の階段に差し掛かった辺りで一斉に拍手が起こる。先程の副総長では無かった事だ。

「相も変わらず、短い」

思わずそう言ってしまうノクタス。周りからの拍手は消えず、ノクタス自身も拍手をしている。

「でも、ハゲの一時間ちよいの演説があつた所為で±0だな」

「それを言つなよ。みんな思ってるからさ」

そうして、何となく今までのモヤモヤとした気持ちのスツとした生徒達は、会場を誘導者の先導で後にするのだった。

~~~~~

「次は……洗剤が無かったな」

そう言っただけで目的に向かつて歩き出すデユナミスと、それに数歩遅れながらも早歩きで並ぶノークの姿があった。その姿は正装をしたままであり、会場を出てまだ間もない事を示していた。しかし、手には多くの荷物がある。

現在ノクタス達がいるところは、この国のほぼ中心地に存在する大型商店街だ。国の中央を通るメインストリートを中心に形成されたショッピングモールの様な所で、様々な地方の国の特産物や製造品を取りそろえ、このエクアゲンではここが商業の起点の場となっている。

この国は様々な学問が精通しているだけあり、国そのものはとても潤っている。学生の出費や生産が経済の実直な回転に関連している中、そこに頭角を現すのは産業系の学問の実施授業だ。この国の経済サイクルの基本は、それら産業系学科の作った野菜や製品を輸出し、この国では手に入り難い物や生産できない物などを輸入している。

そして、その輸入品のほぼ八割がこの商店街に陳列するのである。ここ数日の商店街は普段以上の活気に包まれ、多くの人でごった返している。新学期を祝う形で行われる各店のセールを実施しているためだ。

商店街にある店は所によって、半額以下になる所も存在し、新生の場合は更に値引きと言う本当に気前の良い店も存在する。まるで、エクアゲンへ来た新入生への歓迎と日用品の支給の様な状態になっている。

しかし、例えば支給の様な状態でも、新学期セールを行う事はこの国にとって重要な役割を示している。

この国は毎年多くの人間が留学に来る。学園国家でもある事は、同時に多国籍国家、多民族国家でもある。だが、留学生から見ればこのエクアゲンも異文化の土地だ。エクアゲンの事など右も左も分か

らないという事になり、何かと心細い一面がある。

城壁の外である国外の移動手段が完全確立していないこの世間では、故郷の国から出る事はかなり大きな決心なのだ。

その所為もあってか、生徒の故郷への恋い焦がれが激しくなる側面も多い。そうなれば留学生達が求めるのは自身の故郷に存在する製品だ。

しかし、手に入り難い商品、詰まる所の地方の特産輸入品は物価が上がる。だが、留学生から見れば金銭的に厳しくても地元の特産品等はどうしても欲しくなるものだ。政府側もホームシックなどと言いつまらない理由で退学などと言う事は阻止したい。

だからこそ、最初にできるだけ安く売り、後々は少しずつ買い足していけるようにと言う政治的背景もあるのだ。

つまり、この新学期セール中に本来は安価で買えない様な地方の特産品などを安売りし、留学生に売る事によって、ホームシックななどが原因で国へ帰らせないようにする為の政策でもあるのだ。

そして、店側はこの機会にどこに何があるのかを知ってもらい、リピーターになってもらう事も兼ねている。

勿論、店によっては純粹にお祭りとして楽しんでいる所もあるし、この国の学園生活に慣れれば、純粹にセールを楽しむ事も何ら難しくない。寧ろ楽しまなくては損である。

その中でノクタス達は人とぶつからない様にしながら進んでいく。その動きは見事な動きで一度も人とぶつからず、スルスルとスムーズに前進していく。

この動きは二人が戦士として育ってきた賜物だ。かなり人でごった返し、芋洗い状態の商店街で人とぶつからないのは不可能と言える。しかし、二人はまるで目の前に何も無いかの様に進んでいく。

「そう言えば、今日はクラスで歓迎会とかあるんだっけ？」

ノクタスは思い出すようにデユナミスに尋ねる。

戦士学科にはどの学年や生徒数に関わらず、全体で三つしかクラスがない。

戦士学科は少額を卒業すれば、編入が可能だ。エクアゲンに幼少の頃から在国していても、まずは初等部を卒業しなくてはならない。

初等生の時に生徒が希望しない限り普通の中等生になり、卒業時に生徒が希望すれば戦士学科に入る事が出来る。その時、組分けロジックと称されるペーパーテストを受け、三つのクラスのいずれかに分けられる。

クラスは「デルタ」「スクエア」「ペンタゴン」の三つが存在し、各国家や各地方に存在する「ギルド」と同じ効力を持っていて、基本的に国に任務が来て学園に渡され、最後にクラスを通して生徒を募集する。という流れを持っている。

遠回りの様に見えるが、本来依頼する側に必要な手続きを全て依頼される側である国が行う為、寧ろ依頼主には好評なシステムだった。

「あゝ。そう言えばあつたな。確か一七時からだったかな？」

ノクタスは愛用しているデジタル式の腕時計を見る。そこに指示された時間は一六時四〇分。

「……おっと」

ノクタスは隣を歩いていたデュナミスの肩を叩き、自身の腕時計を見せる。

「わぁーお」

デュナミスは大げさに驚いた様な顔で唸る。

そうして二人は顔を見合わせると、荷物を両手に持ったまま、北に向かつて一気に走り出す。これまた走っているのにも関わらず、誰ともぶつからないまま一気に商店街の長いメインストリートを駆け抜けて行く。

彼らの目指す場所は、全学科が存在する学園国家エクアゲンの中枢の一つ。

ノクタスとデュナミスの二人は『中央学部』を目指すのだった。

第一章 第2話（前書き）

この物語はフィクションです。

この物語の人物、団体、国家、その他全てのものとは、名称が同一であつても何の関係もありません。

この小説は縦書きで読む事を御推薦します。

第一章 第2話

エクアゲンの領土は東と西に広がる楕円状になっている。

その国の中心部から若干北寄りにある中央学部である。

この国のほぼ全ての場所から見える時計塔が、ピラミッド型の建造物から生える様な形で存在する。それを中心に、湾曲しながら左右対称に広がる宮殿の様に豪華で巨大な建物が十段程ある階段の上に存在する。それは最早芸術と言っても差し支えないほど、壮大な美しさを持つ見事な建造物。これが中央学部の本堂である。

本堂から見て国の最南端に位置のある国門から、真っ直ぐ伸びるメインストリートの終着点が本堂なのだ。

メインストリートに乗って学園内に入る前に校門があり、時計塔に向かう様に真っ直ぐ道が延びている。本堂の目の前には大きな噴水があり、その周りにはいくつかベンチが見える。

大通りのすぐ左右にはそれぞれ造りが違いながらも、双方ともモダンな雰囲気醸し出す大きな屋敷の様な洋館だ。それが研究棟だ。中央学園の本堂から離れすぎず寄りすぎ無い距離の置かれているこの研究棟は、主に工学や化学などの理科系が使用している。

この学園の総面積は国の十分の一を誇る。問答無用に学園本部である中法学部こそがエクアゲンが要する建造物内で最大の敷地面積である。

そして、戦士学科のクラスはそれぞれ学園敷地内の北東、東南、北西にある。

二人の辿り着いた場所は北西の位置にある二階建てのモダンな造りをしている建物。

ノクタス達の通うデルタクラス中は、大きな酒場の様な場所、棚には酒も存在あるカウンターといくつもの長いテーブルに背凭れの無い長椅子がある。

学園内にあるべき物とは思えない様なその内装は、歴代の戦士学

科生徒達が改装を施したものだ。

ノクタスとデユナミスの二人はその戦士学科デルタクラスの扉を開け、中に入る。

「セーフだ。デユナ」

「ああ、思ったより早く着いたな」

軽く切らした息をすぐに整える二人の目の前には、多くの生徒達が椅子に座り、各々菓子を食べたりジュースを飲んだりし、中には酒を飲んでいゝる者もいた。その全員に共通した事は騒いでいると言ふ事だ。

「遅かったな？二人とも。なんだ？その荷物は」

二人の横からシャパンの入ったグラスを持って声を賭けてきたのは、黒い瞳をこちらに向け、長身で背中まである黒髪を髷の様に結んでいる青年。来ているタキシードもとても栄える整った顔立ちとスタイルだ。

「トウヤ先輩、どもつす」

デユナミスがとても砕けた感じで挨拶をする。

彼の名はトウヤ・カゲツ。名門戦士の出で、このデルタクラスの中で優良株の戦士だ。

その素質は目を見張るものがあり、実質デルタクラスのエースとなつてゐる程の実力者だ。しかし、その事を前に出そうとはせず、とても優しくとても頼りがいがある兄の様な美青年だ。色々な人に慕われていて恨まれる要素を一切持たない様な人間と言えるだろう。

「これは今日の俺らの戦利品です。セールだし」

ノクタスが袋を掲げてそう言つと、トウヤは初めて今日がセールを実施しているのに気が付いた様な感じになる。

「ああ、そうだったな。そう言つた物は何もしなくてもカナンがやるからな」

「相変わらずの鴛夫婦で」

「否、まだ夫婦ではないな」

呆れる様なノクタスの声に、意見を言つてきた女性の声が耳に入

る。声はトウヤの後ろから聞こえていた。

目を向けると、長さは腰まであろう綺麗な黒髪を頭で結い、少々切れ目をしながら穏やかな印象を受ける美女がそこにはいた。

その美貌は赤を基調として振袖を着ている為か、更に際立っていた。ただ、何故かうなじや肩甲骨が露出していて妙に色っぽい。

「どーもです。カナン先輩」

ノクタスが砕けた感じ挨拶した女性の名はカナン・キサラギ。

このデルタクラスで最強クラスの女戦士であり、こちらもトウヤ同様かなり有名な戦士の家系の生まれで、彼女の父親は世界的に有名な戦士だ。

ただそれを鼻にかけることなく、穏やかでとても家庭的な一面の持ち、とても落ち着つきを持った優雅さを感じる雰囲気醸し出す才色兼備な女性。

正に多くの男が思い描く理想の女性像を具現化した様な人と言えた。

しかし、そんな女性であるカナンは普段から無駄に色っぽい。服装も動き易さ重視なのか、片端が足のきわどい部分まで割けているミニスカートを良く履き、もしくは今回の様な状態の着物を着ている事が多く、そんなものを着ているのに周りの目を気にしていないと言っより気が付いていない。所謂天然でもある。

このデルタクラスを代表する容姿、実力を持った二人は、幼馴染で婚約者同士と言っまるで漫画の設定の様な関係にある。その上とても仲が良く恋人同士で普段から一緒にいる事が多い。お互い心の底から大切にしているようで、長年連れ添った熟練夫婦の様な意思疎通まで行う事ができる。

「ああ。しかし、随分と大荷物だな？ 一旦家に帰ればよかったのではないか？」

カナンはそう言って、珍妙な物を見る目でノクタス達の両手を見る。

「まあ、その反応も分かりますけど……」

「ノークが計画をしつかり立てないからこんな事に」

「いや、十中八九以上お前の所為だからな？ 計画者はお前だからな？」

デュナミスのキラパスのボケに即座に突っ込むノクタス。

そんな二人を見ている上級生の目は穏やかで和やかだ。

「相も変わらないな。とりあえずこちらに來い。椅子は空いている」
カナンは振袖の為か、ノクタス達がいつも見ている様な速さより、若干遅い速さで二人を誘導する。

二人が案内された場所は、疎らに席に着いている生徒達の中でも空白ができていた場所だ。ノクタスとデュナミスは足元に荷物を置き、席に着く。

トウヤとカナンも二人揃って近くの席に着く。

「ノーク、デュナ。どこ行つてたの？」

座つた目の前には煌びやかなブロンズ髪をロングにし、『球の肌』
と言う言葉が最も適切だと言える綺麗な美白の美少女がいる。

こちらはカナンの様な派手な服ではなく、シックな感じのキャリア
アウーマン的な正装だ。

「おうレン。セールに連れ回されてたんよ。こいつに」

「失敬な。俺はただ貧乏なノークに恵みをだな……」

「なら、この商品全部おれが貰う」

「あ、嘘。止めて」

安い漫才の様なやり取りをしている二人を呆れた様な顔で見ているレン。

「仲良いね。相変わらず」

そう言つて、何となく羨ましそうにノクタス達を眺めている女性
の名はレン・エクレール・カダージュ。

戦士の家系として盤石な地位を持つ、名門カダージュ家の娘であり才女。

一見、性格は無口で無愛想な感じがするが、実は優しく友達想いで偏見をあまり持たない。そのギャップから一部でツンデレとも言

われる。

他人に興味の無い様な素振りなので壁を作っている様に見えるのだが、実は結構友達が多く商店街では顔が広い。何故なら、皆レンが優しい人間だと知っている現れだ。

ただ、本当に心を許している人間には普通の女の子の様な感じになり、お茶目な面もある。

ノクタスとデュナミスも彼女の中では心を許せる地位にいる様だった。

「ところで、これから何やんの？」

デュナミスが周囲を見渡しながら疑問を呈す。

「担任とクラス長の挨拶」

簡素に答えるのはレン。

レンは口元に持って行ったグラスを傾け、青い飲み物を口の中に流し込む。

「俺もカクテル飲も」

カクテルと言っても未成年用に開発された飲み物だ。

ここは酒場の様な場所でもやはり学校だ。それなりに規則・法律はある。

その規則・法律に違反せず、しかし飲酒している気分を味わう為に作られた飲料水をカクテルと総じているのだ。

「ノーク俺も。レッドで」

「分かった」

そう言っただけでノクタスは席を立ち、酒などが置いてあるカウンターに向かう。

カウンターに向かっている最中、ほんの一瞬だけ視界に幼い子供が写った。

「え？」

ノクタスはずいぶん、立ち止り子供がいた場所を見る。しかし、そこには誰もいない。

ノクタスが立ち止って見直したのには理由がある。

戦士学科は中等科からの編入と言うシステムを取っている。それはつまり外見を見て完全に子供と言う人間が少ないのだ。

勿論、背の小さい人間はいるが見た目が『幼い』と言う印象を受ける人はそうはいないのだ。

「ちよつと、失礼」

そう言つて人混みを掻き分け、クラスの扉から外に出る。

言われの無い違和感がノクタスにあった。しかし、その違和感を表現できる言葉が無かった。

相変わらず大きな騒ぎを感じさせる様な喧噪を出しているクラスを背にし、ノクタスは扉の前で辺りを見渡す。

「どうしたのだ。ギルハーツ」

そう言つて横から声を掛けてきたのは男。

黒のジャケツトスーツを着ている男性がノクタスに声を掛けた。端正な顔立ちで短くカットされた髪がそれを際立させている。

「フェイ先生」

フェイと呼ばれた男はデルタクラスの担任に当たる人間だ。名前をファン・フェイ。

「今、子供がいませんでしたか？ 5〜6歳くらいの」

「いや、見ていないな。誰の子なのだ」

「いえ、知らないんですが・・・何となく気になったというか。でも先生が見てないのなら、気のせいかもしれないです」

ファン・フェイは高名な戦士である。

その実力は世界的に見ても最高峰であり、全土に名が知れ渡っている一流戦士。エクアゲンでは国内最強説まで流れている程であり、現在でも国外からの挑戦者は多い。

何故、世界的に有名な戦士である人がエクアゲンで教師をしているかは定かではないが、生徒想いの良き教諭である事は誰もが知っていた。

戦士の世界で生きて来て、注意力に卓越した一流戦士のフェイが見ていないと言っている時点で、子供の存在はノクタスの中で少し

霞んだ。

「そうか。なら良いのだがな。私は中に入ろう。騒いでいる生徒達に、ほどほどにしないと明日からの授業に出れなくなると脅してこなくてはな」

堅そうな雰囲気から余り感じ取れない子供っぽい微笑を見せて、フェイはクラスルームの中に入って行った。

「……………まあ、帰っただけなか？」

少し不満を抱えながらも、ノクタスはクラスルームへと引き返した。

「彼は……………気が付いたのかな？」

声はクラスから漏れる喧噪に消されていた。

第一章 第3話（前書き）

この物語はフィクションです。

この物語の人物、団体、国家、その他全てのものとは、名称が同一であつても何の関係もありません。

この小説は縦書きで読む事を御推薦します。

第一章 第3話

始業式が終わると言う事は授業も始まると言う事である。

戦士学科のカリキュラムは基本的に固定されている。大体ほぼ全ての学年が月曜日と水曜日に実施授業があり、それ以外はフリーだ。勿論普通ならその空き場に筆記授業を入れる必要がある。何故なら筆記と実技それぞれに獲得しなければならない単位数が存在する為である。

一年間の前後期で別れる二学期制度をとっている為、前期で取れる単位と後期に取れる単位の数を調整しながら授業を入れる事で、自分なりのカリキュラムを上手く作る必要がある。

特に戦士学科の場合は？課外授業？通称？任務？がある。

この任務で取得する単位も獲得必要数があり、受注すれば多くの日程を失うものであり、尚且つ難易度により取れる単位が疎らな為、非常に厄介な代物でもある。

学園初日はクラスルームで授業カリキュラム設定だ。

多くの生徒が長椅子に座りながら授業内容を見ながらカリキュラムを決めて行く。

この中で前日の宴会とは明らかに違う光景がある。
それはまず制服である。

この学校には中学生までしか制服がない。しかし、戦士学科の生徒には戦士学科生である証として制服が支給される。

男女共通の銀色の肩当ての付いた黒の上着に、首に着用する背中ほどまである赤い外套。肩当ては1枚から三枚に重なっていて枚数の違いが学年を表す。上着はボタンでは無く革ベルト式の留め具で前を留める。

男子は黒の革ベルトに白のズボンを着用。女子は赤を基調として黒と黄色の線を合わせたチェックスカートを着用。

学園内にいる間は基本的にこの制服を着なくてはいけない。また

戦闘時に着用できるように丈夫な設計になっている。

そして、それぞれの座っている人の横の位置には剣やら槍の武器が置いてある事だ。

その武器こそ戦士の証である。戦士学生には武器の所持が許可されている。

大抵の先進国ならば武器を国内に持ち込むのを嫌う傾向があるが、戦士学生の場合は『命』とも取れる物を取り上げる訳にも行かないのである。

「だくそ！　なんで『現代文章学』の教科が金曜なんだよ！？」

「入れちまえ」

「これ入れたら任務ができねえ！」

ノクタスのからかう様な発言に反発するデユナミス。

ノクタスとデユナミスは隣同時で座りながら、カリキュラムを決めて行く。

ノクタスの隣には鞘に落ち着いている赤い大きな剣がある。通常の剣より長く多少だが太くも見える。

一方デユナミスの腰には二丁の銃がある。普通の銃とは違いホルスターに入っているのではなく鞘に入っている。銃身の長さは60cm程ある様に見える。

「マジどうしよう」

「俺は決まったぜ」

そう言っ て授業を決め終えた紙の上にペンを置く。

大抵の戦士学生は金曜と木曜のカリキュラムを空けようとする。

そこで任務を入れる事で、土曜日と日曜日を上手く使うのだ。元々月曜と水曜に実施授業がまとまっているのはその事もある。

任務にかかる日数が疎らだ。それこそ下手をすれば1週間以上かかる場合もある。

戦士学科にいる事で授業の出席日数は容認されるが、授業には間違いなく置いて行かれる。そうなればテストで散々な結果になるのは目に見えている。

「入れなくても良いじゃん」

「入りたいの！」

デュナミスは大の好きだ。

ライトノベルを最も好むが、物語の書いてある本であればそれだけで好物になる。

本好きだからこそその教科の選択をしているのだが、かなり都合の悪い位置に授業があるので四苦八苦している。

「ノーク。カリキュラムできた？」

「おう、レン。出来たよ」

後ろから声を掛けてきたレンにノクタスはカリキュラム表を見せる。

「……うん」

それを見ながらレンは頷く。

月・火・水の曜日に上手く授業を纏めて、木曜の午前中に1教科入れているカリキュラム。単位数はかなり余裕を持って入れられている。間違いなく任務を重視した内容と取れた。

「OK。ありがとう」

そのままレンは自分の座っていた少し離れた席に座り直し、自身のカリキュラム表を見つめている。

「……君に決めた！」

「決まったのか？ 見せてくれ」

「おう」

デュナミスのカリキュラムを見るノクタスのカリキュラム表と殆ど変らない。

「結局？」

「結局さ。何か問題でも？」

「あるのか？」

「ありまくりです」

そう言っただけにあるコップに入った水を飲み干すデュナミス。

「俺の欲しい教科はこんなもんじゃねえ！」

「なんで戦士科にいったよ？」

「抗えない人生だからさ！」

そう言って、テンションが無駄に高い状態でデユナミスはリュックからクリアファイルを取り出し、そこにカリキュラムを入れる。

「あゝん、もう！ 今年の運氣は尽きた！」

「早い早い」

ノクタスとデユナミスは二人揃って部屋から出る。

向かう先は何処だとは話していないが足は自然と動く。

エクアゲンの校内はかなり特徴的だ。

人口の大多数が生徒である為、生徒の自主性が重んじられ校内の事に関しては完全に生徒任せなのである。

学園の外見が宮殿なのに対し、一部の校内は混沌と化している。まず本堂の一階の殆どが店となっている。しかし、実際は正規の店では無い。

エクアゲンには様々な学科が存在する。その分、多くの生徒が存在し、派閥やサークル、部活も大量にある。隠れた部活やサークルを探せば、その数は恐らく学園の生徒と行事を実質仕切っている生徒会ですら把握し切れていない。

それらの学科やサークル、部活動が自主的に出店しているのだ。これは学科の場合には自主的な実習や課外授業の様な扱いを受ける。その為、生徒会に申請を出し売り上げの一部を学園に収める事で出店する事が可能なのだ。

それは一種の商店街と言えるだろう。その為、通称であるが名前も『学内商店街』と言われている。

その中を進んで二人が目指すのは事務室。一階の丁度中央部にあり、まるで銀行の様な雰囲気醸し出している。

この事務室にカリキュラムを提出し、判を貰わなければカリキュラムの申請は正式に認められない。

「すいませゝん。カリキュラムの判、押して下さい」

窓口でノクタスは中を覗きながら事務員に呼び掛ける。

ノクタスの声でぼつちやりとしている初老の女性がノツソリと出てきた。

「はいよ。ちょっと待っててね」

そうして、二人のカリキュラムを見ながらパソコンのコンソールをカチャカチャと叩き、一枚の学生記入用の用紙をノクタス達に渡す。

ノクタスとデュナミスの二人は渡されたボールペンを使ってそこに名前を書き込む。

「はいよ。これで完了だね。じゃ、判押すから待っててね」

気前の良いお店の女将。そう言った感じの雰囲気を出す受付嬢は、受付の机の下から判を取り出し、カリキュラムに判を押す。

それと同時に。

ノクタスとデュナミスは事務室の出入り口に向かって武器を引き出しながら振り向く。

「……………どうしたんだい？」

思わず時間が止まった様な感覚に襲われた受付嬢の声には二人は反応しない。

「なあ、デュナ」

「ああ、誰かいたな。殺気を叩きつけられた」

ノクタスがデュナミスに先程感じた違和感を確かめると、デュナミス置いて走り出す。

「おい！？ ノーク！」

ノクタスはデュナミスの声には反応を示さず、事務室の扉を勢よく開け、左右の廊下を見渡す。

突然飛び出し武器の剣を引き抜いているノクタスに驚く生徒達がちらほらとノクタスの視線の中に入った。

その中で明らかに幼い容姿でいる子供の背が見えた。一瞬であるが始業式での日の事を思い出すノクタスは、武器をしまって人混みの中を駆け出す。

「おい、ノークー！ ああもう！ おばちゃん！ カリキュラム終

わってる!？」

「あ、ああ」

茫然としていた受付嬢の目の前の机には既に判の押されたカリキユラムがある。

「ありがとうおばちゃん!」

デユナミスはカリキユラムを取るとノクタスを追う。

ノクタスは子供の背中から一切視線を外さない。

子供はまるで何か目的地があるかのように一心不乱に走っている様だった。

ノクタスは走りながら自分の記憶を探る。妙な印象を受けたあの子供の事は頭の片隅に残っていた。始業式の日 of 宴会で見たあの子供で間違いない核心があった。

距離が徐々に近づくが、学内商店街の人混みが多すぎて流石に全てをかわす事が出来ない。少しの接触でノクタスのスピードが落ちると、せつかく縮まっていた距離が少し離れる。しかし子供の方は身体の小ささを利用し、人混みの中を器用に抜けて行く。

追いつけるのに追いつけない悪循環の中で子供が向かっている先には徐々に人混みが引いて行く。

「きゃ! ノーク……?」

「ごめん! レン!」

途中、学内商店街の店の中から出てきたレンにぶつかりそうになるが、ギリギリでかわし走りながら謝罪をしてノクタスは子供を追う。

(よっしゃ、あの先は行き止まりだ!)

少し距離が離れてしまっている状況の中で、子供が向かっている廊下の曲がり角の先は行き止まり。

子供が曲がり角を曲がり、ノクタスがそれに続き曲がった瞬間、一陣の突風がノクタスの身体を叩く。それと同時にノクタスの身体が何かに斬り裂かれる。

「がつ!？」

思わず体勢を崩し、尻餅を付くノクタスは戦士の本能が瞬時に立ち上がる。

ノクタスは立ち上がると同時に行き止まりである場所を見るが、そこには誰もいない。

「え?　なんで?」

ノクタスが茫然としていると左腕と右頬に熱を感じた。そこから赤い液体が流れ出ている。量は微量で至って軽傷だ。

特殊な布でかなり丈夫に作られている制服はパツクリと裂けている。

「ノーク!？」

「おい!　大丈夫か!？」

後ろから追ってきたのかレンとデュナミス。二人はノクタスに駆け寄る。

「あ、怪我!」

「平気だよ。浅いし」

ノクタスは行き止まりである廊下の突き当たりを見ている。

「何だっただんだ?」

デュナミスがノクタスに尋ねる。

「子供だ」

「子供?」

「ああ、学園にいないはずの小さい子供がいたんだ」

レンとデュナミスはノクタスの目線の先の廊下の突き当たりを見える。

「いないぜ?」

「いや、確かにいた。でも角を曲がった瞬間に突風が来て、身体が斬れた。そしたら子供がいなかった」

ノクタス是指で自分の右頬撫でる。指先には赤い粘着性のある液体が付いている。

「ノーク。信じるよ。でも……」

レンはそう言ってノクタスの腕を取り、傷を見る。

「まずは医務室」

そう言ってノクタスの腕を引っ張り歩き出す。目的地は勿論医務室である。

「おわっ！」

レンに引っ張られ思わず声を上げるノクタスは、そのままその後にする。

デュナミスも廊下の突き当たりを一瞥して、ノクタス達の後を追おうした時、微風そよかぜが吹いた様にデュナミスは感じた。

「フッフ」

「っ！？」

突然の笑い声に反応し、デュナミスは腰に装備にしている二丁の銃剣を思わず引き抜く。銃剣とは銃身が刃になっている銃の事を指す。それを引き抜き、腰を落とし臨戦態勢に入る。

しかし、廊下の突き当たりには誰もいない。様々な所に目を向けるが、やはり何もいないし、誰もいない。

「なんだよ？」

デュナミスは気味が悪くなり、そこから逃げるように立ち去った。

第一章 第3話（後書き）

やっと動き出す感じです。

第一章 第4話（前書き）

この物語はフィクションです。

この物語の人物、団体、国家、その他全てのものとは、名称が同一であつても何の関係もありません。

この小説は縦書きで読む事を御推薦します。

第一章 第4話

西暦1693年 四月十六日 春

クラスルームの奥で任務依頼の紙が貼ってあるクエストボードを見ているノクタスの頬には、白いテープの様な物が貼られている。エクアゲンで開発された止血剤を使い傷口を塞いだ後、そこに擦過傷用のテープを張っている。

ノクタスに刻まれた傷は深くなかった。だが、医務室勤務の先生曰く、歪んでいて治り難い形の傷との事だった。

あの子供をノクタスが目撃してから数日が経過していた。学校の方は滞り無く進んでいる。

ノクタスは運勢に見放されていると心から思っていた。

目撃した少年には逃げられる。そもそも存在していたのかも怪しくなってきた。その上、軽傷とは言え怪我をした。更に制服も切られてしまつて修復しなくてはならない。戦士にとって服の破れや身体の怪我は日常茶飯事だが、それでも嫌な物は嫌である。

そんな気持ちを携えていても、授業と単位には何の関係もない。よつてノクタスはクエストボードと睨み合いを繰り返しているのだつた。

「ノーク。今週末は任務へ行くのか？」

クエストボードを見ていたノクタスの後ろから、黒髪を靡かせているカナンから声を掛けられる。学校指定の制服を着ているので普段着の様な色つばさは無い。しかし、同学年の女性と見比べると、何故かノクタスの目には彼女は妖艶に見えていた。

「ああ……うーん。今週は良い感じの任務が入ってないみたいで、悩んでたんですよ」

ノクタスはカナンに向けられていた視線をクエストボードに戻す。「そうか。どうしても新学期序盤は任務の成果に安定した物が無い

からね」

新学期になると任務の受注が始まるのだが、エクアゲンの新学期が始まる前に依頼者の多くが他のギルドへ依頼を出してしまう。その任務が新学期序盤で終わると言う形になる場合が多いので、どうしても新学期の四月中旬までは、クエストレベルが低く単位数の少ない任務だったり、逆にクエストレベルが高く単位数の任務だったりと任務難易度が安定しない。

簡単な任務に出るのも良いのだが、金銭や時間的余裕を見ると簡単にはいかない。任務で授業に支障が出るのは戦士学科の生徒にとつての宿命の様なものだが、その宿命に見合う単位数でなければやはり学生として問題が出てしまう。

「ノークの戦士ランクは確かAランクだったと思うのだが？」

「はい。そうです」

戦士ランクとはエクアゲンにおける独自の戦士の格付けである。

この格付けにより、受けられる任務の難易度なども大きく変わってくる。

ノクタスの戦士ランクはAランク。これは丁度中間と言えるランクである。因みにデユナミスはノクタスと同ランクであり、同学年レンは一つ上のSランク。カナンは三つ上のGランク。そしてデルタクラスのエースであるトウヤの場合は、最高ランクのEXランクである。

このEXランクを高等生で獲得したのは歴代で僅か五人しかおらず、尚且つトウヤの場合は僅か高等二年生で獲得したのだ。

この戦士ランクを昇格させるには、前期と後期の終了時にある戦士ランク昇格試験に合格する必要がある。しかし、昇格試験に参加するには、学期の終了時点で成績条件をクリアし、尚且つ所属クラスの担任教師の承認を得る必要がある。

ノークの目線の先にある丁度良い単位数と難易度の任務もあるが、クエストレベルはSランクである。

「ランクが一つ上ならな。レンが羨ましい」

「精進するしかないだろう？　大丈夫だ。君には才能がある」

「はは、ありがとうございます」

カナンはクエストボードを見て、ノクタスの顔を見ずに話を続ける。

「レンに頼んで一緒に任務に行ったらどうだい？　Sランクの人間がいればクエストレベルがSでも行けるであろう」

通常、戦士ランクが高い生徒と共同ならば自身の戦士ランクより高い任務でも行う事が出来る。そうすれば自身の戦士ランクに見合った以上の単位獲得も可能だ。

「……その。レンに頼り過ぎるのはどうかと黙っていて」

ノクタスは鼻の頭を人差し指が掻きながら、少し気まずそうに言う。

「ふふ、男子だね」

男としてのプライドなのか、戦士としてのプライドなのかはカナンには分からなかったが、カナンは何となく可愛い後輩の想いを察し、まるで母親の様な嬉しさが胸に滲んでいる。

「む？」

高等科1年になり、心なしか幼さが抜けてきたノクタスの横顔を見ていたカナンが、不意に後ろを見る。

「どうしました？」

後ろを向いたカナンに気が付くノクタスが尋ねる。

「いや、誰かに見られていた様な……気が……」

ノクタスも視線を後ろに向けるが、別段変った所は無い。

「もしかして……あの子？」

「なんだ。心当たりがあるのか？」

ノクタスの呟きがカナンの耳に入り、先程の様な和みの空気から若干引き締まった空気に変動する。

「それが、ですね……」

ノクタスがカナンの方に視線を戻した言葉を発した時、大きな音を立ててクラスルームの扉が開かれ、男子生徒が大声を上げて中に

飛び込んできた。

「おい！ 誰か医療師いないか！？」

医療師とは戦士において治療に卓越した存在の事である。戦士学科にもいくつかの志す道があり、その中で医療師と言う選択肢があるのだ。

「どうしたの？」

「クラスの前で人が斬られてて……！」

呼び掛けに答えた女子生徒の声に、叫んだ男子生徒が答える。

それと同時に、恐らく医療師だろう女子生徒が自分のカバンを持って飛び出す。

それを追う様にノクタスとその他の生徒もクラスルームの外に続いて行く。一方のカナナは厳しい顔をしてゆつくりとノクタス達の後を追った。

「大丈夫！？ 私の声分かる！？」

血塗れで意識を失って倒れている男子生徒の肩を叩きながら、医療師の女子生徒は大声を出して呼び掛ける。

周りには多くの生徒が集まってその様子をざわめいて見ていた。

そこに澄んだ声が響く。

「皆散れ！ 見せ物ではないぞ！」

カナンの号令で生徒がある程度動くが、それでも人垣は消えない。未だ消えない人垣からノクタスが出る。そして、治療している医療師の女子生徒の反対に座り込んで、傷口の様子を見る。

「……同じだ」

ノクタスは思わず口に出してしまった言葉に反応したのはカナナだった。

「何がだ？ ノーク」

「俺の斬られた傷口の形とほぼ同じです。俺の頬と左肩の傷を……まるでそのまま大きくしている様な傷です」

カナナは眉を顰め、その発言に質問を呈す。

「誰にやられた？」

「恐らく、子供です」

「子供？ それに恐らくとはなんだ？」

ノクタスは、その場では口を噤んでいた。何故なら、この状況は余りにもあり得ない状況だからである。

戦士には傷口の見分けは容易い。だから断定はできた。しかし、問題は場所と時間である。学生とは言え、これだけの戦士を相手に問題を起す愚か者はそういない。よって、この戦士学科クラスルームは国内でも有数の安全地帯である。

更に今は授業終わりの時間帯。この時間帯に誰にも悟られないで被害者を出すなど不可能なのだ。

ノクタスは後に自分の知っている事を全てカナンに説明をした。それを信じてくれるとはノクタス自身思っていない。勿論、自分を使用してくれているのは分かった。しかし、それと話を信じるのは別物だとノクタスも理解している。

負傷した生徒は命に別状はなかったが、重傷である事は目撃者一同肯定できた。

この事件は学園内だけでなく、国内でも大きな騒ぎになった。

軽傷とは言え、第一の被害者となったノクタス。あの少年が犯人なのか、そもそも存在していたのか。確かめてはいないが現状では目撃者は自分以外いない。

あの少年。正体不明であり不確かな存在の少年に対しての恐怖が、ノクタスの中で大きくなっていく。

西暦1693年 五月十日 春

大通りから外れた小道。その小道から更に外れた小道。そこにその店はある。

外観は綺麗だが特に目立った物は無く、店ではあるが客引きの要

素は無い地味な外見。

この店の中に足を踏み入れてすぐ横に広がるカウンターがあり、そこに五つの席がある。飲食店にある様な典型的な回転式の丸椅子だ。その奥にはテーブルと四人座りの席が二つと言う、お世辞にも大きいとは言えない店。

この店は所謂喫茶店である。しかし、店内に人の気配は殆ど無く換気扇から香るのはコーヒーや食欲をそそる様な香りでは無く、何故か独特の匂いを持った煙草の煙。

「なんか頼めや、コラア」

低い声だった。カウンターのの中にある椅子に座っている男の声である。

金髪をオールバックにし、無精髭の様な顎髭を生やした啞え煙草をした中年男性。半袖のシャツに至って普通のジージパン、黒いエプロンと言うシンプル過ぎるとも言える格好。しかし、一番目立つのは一九〇近い長身と凄まじい筋肉質な体そのものだった。何を隠そうこの男こそ不快な煙草の匂いの正体であり、この喫茶店の主である。

喫茶店の主の目に前にある灰皿には煙草の吸殻が山の様に積まれている。

「客がいるだけでも奇跡に等しい癖に何言っちゃってんの？　つか、客だと思ってるなら煙草止める。ゴウジさんの煙草は独特の匂いで臭い」

この店の現在数少ない人の気配と同時に、唯一の常連客は店主のゴウジに砕けた口調で答える。

隠れ家と言うより秘密基地に等しい程の店に、客とも言えない様子で迎えられているのは暇に飢えた老人や仕事の無い人間とは違い、一介の学生であると同時にまだ少年と言える存在である。その少年は新聞を陰しい顔で読んでいる。

「珈琲一杯頼まねー餓鬼を客と言えってのか？」

「じゃ珈琲。て言うか、看板でも作れば？　一応ヴォルル喫茶って

名前があるんだし？」

「金もつたいねえだろ？」

口を動かしながらも珈琲豆を引いて豆から珈琲を作っている店主。
「その金を稼ぐための看板じゃん」

自分の店を何とも思っていない店主の発言に呆れを見せる。

「で？ ノークの坊ちゃんは何を見てんだ？」

「誰が坊ちゃんだ。これだよ。ジャックナイフ事件」

「ああ、あれか。戦士学科の人間だけ狙った辻斬りだな」

ノクタスは険しい表情を崩すことなく新聞の詳細欄を見つめる。

「大丈夫だ。おめえみたいな半人前は狙われねえよ」

一瞬だけノクタスの眉が吊り上がるが、此处で口論しても何にもならないし、第一怪我と言う怪我をしていない自分の言葉を信じてくれるとは思えず、ノクタスは口を開かない。

「重傷者は十名を超え、現在、この正体不明の犯人に懸賞金が懸けられている」

ゴウジはノクタスの目の前に珈琲を置きながら、新聞の文面を読み進める。

「被害者の話によると、巨大な鉄で斬り付けられたと言う詳細が多数上がっているが犯人の姿を見た者はおらず、凶器と思われる鉄のみしか手掛かりが無い状況である。随分とおもしれえ記事だな」

完全に他人事であるゴウジに取って、この記事を見て思う所は無いのかもしれないが、ノクタスにとっては他人事ではない。何より、ノクタス自身が最初の被害者であるから。

（鉄で斬り付けられる……………あれは鉄だったのか？）

ノクタスは頭の中で呟くと、ゴウジの出した珈琲を喉に通した。程良い苦みと程良い濃さ、下を撫でるこの感触はゴウジの腕を物語る。

「俺としてはこっちの方が良いと思うぞ。強力な回復役の完成間近。戦士学生にとって最良の特効薬」

「怪我しなきゃいんじゃない？」

「身も蓋もねえ事を……お？」

ノクタスが適当な受け答えで珈琲に舌鼓を打っていると、滅多に人の来ないヴォールル喫茶の扉が開く。

「いらつしゃい」

「やっぱいた」

扉の外から覗いて来たのはデユナミスは半身だけ店の中に入れて、ノクタスを見る。

「暇だと大抵ここだ」

デユナミスの発した声に答える様にノクタスが答え、珈琲を飲み干す。

「俺の店は休憩所じゃねえぞ。餓鬼二人」

「いいじゃん。暇なんだし」

デユナミスもゴウジと顔見知りなので、殆ど遠慮無しで受け答えをする。

「手前はノークがいねえと来ないだろうが」

「ま、そうだけど。で、ノーク。午後の授業」

「ああ、じゃ、ゴウジさん。金、置いておくよ」

そう言っただけで軽く挨拶し、ノクタス達は店を出て行く。

「その上、客まで取って行く」

愚痴なのか何なのか、ゴウジは少し気分良く独り言を呟く。

（波乱だな。久々の）

ゴウジは誰もいない静寂極った店内で煙草を新たに吹かし始める。

第一章 第4話（後書き）

なんだか説明が多くてすいません。

もっとうまく書けるようになりたいものです。

第一章 第5話（前書き）

この物語はフィクションです。

この物語の人物、団体、国家、その他全てのものとは、名称が同一であつても何の関係もありません。

この小説は縦書きで読む事を御推薦します。

第一章 第5話

その日のノクタスとデユナミスの二人が授業を全て終え、本堂から出ると帰りの時間という事もあってか、いつもより賑わいを見せている。

「なんていうか。違和感あるよな」

「戦士生徒がいないからな」

ジャックナイフ事件により、戦士生徒の外出回数は極端に減っている。

特に国から制限されているわけではないが、戦士生徒全員が警戒をしている。斯く言う二人も普段より気を張っているのは事実だ。

「絶対あの子だと思うんだが」

「またその話かよ。目撃者がいない以上、その話は実証できない」

ノクタスは最近この話ばかりしている。

実際話をしているといってもデユナミスだけなのだが、ノクタスはどうしてもあの子供が忘れられない。

「まあ、もういいじゃんそれ。国側も調査してるんだしさ。それで、今日もまっすぐ帰るんだろ？」

「ああ、悪い。俺これから食材買ってこないと。もう、冷蔵庫空っぽだ」

この冷蔵庫と言う物はどの国にでもある物ではない。世界でも先進国と言われている中でもトップクラスの国でしか所持できない高級品なのだが、エクアゲンでは既に一般レベルで復旧している。何故なら、開発者が当時のエクアゲンの学院生だったからだ。

「今じゃ普通に使ってるけどさ。便利だなって思うよな。冷蔵庫」
「まあ、少なくとも、俺の故郷ではやっと普及し始めたな」

ノクタスは苦笑いであの光景を思い出す。

元々、ノクタスの故郷は小国の農業国家で長年の貯蓄から裕福な国ではあるが、電球などがある程度の田舎の国である。ノクタスが

故郷に冷蔵庫を一台持ち帰ったことがあり、その時の人々の驚きようは言葉で表現できるものではなかった。大の大人が「中が冬になっている！」と大騒ぎをした程だ。これをきっかけに冷蔵庫はノクタスの故郷で普及し始めた。それを賄うため、一家に一台あった発電機から、国营の発電所を作る必要ができてしまい、そのせいで貯蓄が赤字一步手前まで減少したという話を聞いていた。ただ、発電所を作るほどの貯蓄があつたのにノクタスは素直に驚いてしまった。実際、このような傾向は珍しくない。この事例で分かる通りエクアゲンは世界でも有数の近未来国家となっている。

携帯電話と言う物。それ以前に電話と言う物も裕福な国や、大国でなければ一般には普及していないのが現状である。小さな国では電話を重要公共施設に置いている国もあるが、そういう国はあまり多くない。電話は回線も引く必要があるので、莫大な費用を必要とするからだ。その為、現状世界で一般に普及している最良の情報入手方法はラジオであるのが現状だ。

エクアゲン以上の近未来国家もあるが、その段階まで行くと空中にパソコンのディスプレイが出てきたりする様な漫画の世界に突入してしまう。

このような世の中なら、エクアゲンがどれほどの発展している国なのかが良く分かる。

「俺の故郷じゃ、テレビの普及が今の限界かもな。ここじゃマンシヨンに両方とも備え付けなのにな」

「惨めになるほどの差だ」

「はは」

少なくともデユナミスの故郷より、ノクタスの故郷の方が田舎なのだ。

先進国と途上国の差は世界政府から見れば問題だが、国々から見ればそれは大した問題ではない。国には国の生き方があると言えば、結局それで終わりなのだ、

「じゃ、冷蔵庫に入れる食材を買ってくるわ」

「大丈夫か？ 一人で。どうせ帰るマンションは同じなんだしょ」

「大丈夫だよ。まあ、襲われたら犯人の顔くらいは見ておくさ」

「……分かった。じゃあな。気をつけるよ」

軽い挨拶のまま、二人の帰路は二つに別れる。

けしてノクタスは自分の身が安全だと確信している訳ではない。もし、犯人に巡り合ったとしてもそれはそれだと言う事なのだ。ノクタス自身は戦士としてのプライドなど地に捨てても良いが、こっちはこっちで事情がある。寧ろ狙ってほしいと思っているのも事実だ。

あの時、もし自分が何か出来ていたら状況は変わったはずだ。良からうと悪からうと変っていたはずだ。既に過ぎてしまった事を後悔するのは戦士としては愚の骨頂。先を考えて結果を見出すのが戦士だ。だが、その常識を覆すのは個人の自由だ。ノクタスにとって必要なのは自分が満足しているかだけなのだ。

食材を買って、ビニール袋を手を持ったままノクタスは歩く。いつもの帰り道とは違う道である。人気の少ない所を選んで進んでいく。まさに襲って来いと挑発している行動である。

「マジかよ」

しかし、ノクタスの意に反して何事もなくマンションの前に着いてしまった。既に辺りは暗くなり街灯には光が灯っている。

「なんでだよ？ 一回襲ったらもういいのかよ」

まるでマゾヒストの様な行動と発言である取れるが、それでも会いたかったのは事実だ。

「くそ。もうなんでだよ？ これじゃ、ちょっと遠回りして帰ってきたです」で終わりじゃねえか」

不満が完全に口から零れているが、ノクタスの気はそこまで回っていない。常時不満を口から流しながら、ノクタスは自宅の扉の前に来る。

「……マジかよ」

思わず拍子抜けの調子で呟いてしまった。その原因はノクタスの

視線の先にある。

そこにはノクタスの部屋の扉を背凭れにし、体育座りで蹲っている少年にあった。

「……………」

無言のままに少年はノクタスを視線に捉える。

ノクタスは姿と顔を確認する。上下共に黒い服。黒い短髪で端麗な顔つき。髪を伸ばせば女の子でも通るのではないかと言うほど綺麗な顔をしている。そして、あのクラスルームで感じた感覚である『幼い』と言う印象を受ける。大体十歳前後と思われる。背格好からしてあの子供と酷似している。

「……………久しぶり」

十分警戒をしながらノクタスは挨拶をする。未だに頬にある傷は消えていない。

「久しぶり」

ノクタスの予想と違い少年も声を出してきた。そして、この言葉と同時に心音が少し早くなった。

「なんでここにいるんだ？」

「君の家だから」

少年はノクタスが疑問を呈したらすぐに返却した。

ノクタスは言葉の駆け引きが得意と言う訳ではない。そう言うのは、口が達者で頭の回転の速い親友の役割である。

「俺のだから？」

「そう」

「なんで俺のだからだ？」

「君は僕を見たからさ」

その言葉を聞いた瞬間、ノクタスは一気に警戒を強める。場合によつてはこの場で襲われると踏んだ。

「僕が見える？」

「ああ。完璧に」

そう言う少年は立ち上がり、ノクタスの目を凝視する。

ノクタスは袋の持っている腕に力を入れ、持っていない方の腕は力を抜く。袋を投げて、背負っている武器をより早く引き抜くためだ。

「そう……僕はね。他の人には見えないんだよ」

「……………え？」

思わず間抜けな言葉を出すノクタスの声帯。

誰にも見えないとは一体どういう事なのかノクタスには分からない。その言葉をどう捉えていいのかが分からない。

「おかしいと思わなかった？ 目撃者ゼロ」

その言葉を聞いて、ノクタスは電撃を受けた様な衝撃と同時に、これまでにない緊張が走った。

ノクタスが初めて少年を見たのは戦士学科の人間が数多にいたクラスルーム。そして、二回目に見たのは多くの生徒にごった返す学園の廊下だった。

そこにいて目撃者がゼロと言う奇跡に近い偶然があるかもしれない。聞き込みをした訳ではないからそれも憶測でしかない。しかし、問題はそこではないのだ。あの時、フェイとレンがいた事が問題だとノクタスは気が付いた。

クラスルームでノクタスが少年を見つけ外に出た時、すぐにフェイがいた。あの時はフェイが目撃していなかったのは偶然だと思った。しかし、二回目に少年を見つけたノクタスが廊下を走っていた時は、ノクタスはレンとぶつかりそうになったのだ。

あの時にレンが少年を目撃していないはずが無い。レンは戦士だ。それも学園の戦士ランクではノクタスよりも上である優秀な戦士なのだ。

そのレンはノクタスの話を聞いて「信じる」と言ったのだ。つまり、それはノクタスの目に入っていた少年を見ていないと言う何よりの証拠である。

「……………っ！」

ノクタスは自分の間抜けさを呪った。

あり得ないのだ。本当にあり得ない。思わず唇を噛むノクタス。背中は冷汗を噴いている。

戦士は常に死と隣り合わせの職業だ。その危険度は兵隊や軍人より上だ。職業人口が少ない要因はそこにもある。その戦士が襲われて気が付かない。そんな事はあるにないのだ。

だが、気が付かないのではなく。視えないのなら。目視できない敵なら。今までの全ての事件の合点がいく。戦士はそんな敵に関しての撃退方法は知らないし、教えられていない。少なくともノクタスは知らないし、教えられていない。

「君は…… どうして僕が見えるんだろうね？」

そんな言葉を言われても本気で困る。ノクタスは冷静に頭の中でそう考えると同時に身構える。

「僕はア・ホープにいるよ」

それだけ言っていると、少年はノクタスのいる方向に走ってくる。

「つあっ！」

ノクタスはほんの一瞬だけ遅れるが、それに反応し背負っている剣を抜刀の要領で少年に撃ち降ろす。子供の足とは思えない程の速度で突進してくる少年。迎え撃つ剣のタイミングは微妙だが、ギリギリで迎え撃てるであろう距離。

（獲……れるっ！）

狭い通路でも剣は障害物に触れることなくノクタスの腕により振り切られた。しかし、渾身たる必殺の攻撃は空を斬る。

少年は何時の間にかノクタスと擦れ違い。そのまま、ノクタスの来た方向へと走って行った。

ノクタスは数瞬遅れで反転し剣を構える。そこには何の気配もない。

「…………… ハア！ ハア！」

一瞬の間を置き、ノクタスは思わず肺の中にある空気を一気に吐き出し、間を置かず外にある空気を吸い込む。息は荒いままで、心音の速度は今まで最速を誇っている。

思わずノクタスは座り込んでしまふ。ようやく酸素が頭の方に回ってきた。そして、ノクタスは今の状況を確認する。何時の間にか体に纏っている服は濡れて身体に張り付き、額には汗の玉を溜め込んでいた。剣の握っている手も汗が噴き出している。このままでは間違いなく風邪を引くだろうなど、冷静に考える頭の機能が少し怖くなった。

「ア……ホープ？」

良く分らないが、少年はそんな事を言った。これは誰にも相談できない問題だと今まさに理解した。なんせ、他の人間にはあの少年の事が視えていないのだ。どうにかできる問題でもない。何故、自分にだけ視えているのかと言う話はこの際どうでもいい。情報が手に入った事は諸手を上げて喜ぶべきだ。

ノクタスは冷静に改めて辺りを確認する。気配は無く、聞こえるのは自分の荒い息遣いだけだ。

ノクタスは立ち上がって部屋の鍵を取り出し、部屋の鍵を開ける。そして、中に入ってキッチンの冷蔵庫の前に食材の入った袋を置く。「……うわ」

ノクタスは思わず声を出してしまった。目線の先にあるものは紫色になっている袋を持っていた自分の掌だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3417s/>

all the way

2011年11月23日19時52分発行